

四国大学紀要, (A) 53 : 19–37, 2019
 Bull. Shikoku Univ. (A) 53 : 19–37, 2019

リチャード・コブデンと自由貿易 平和の追求

蔵谷 哲也

Richard Cobden, Free Trade and the Pursuit of Peace

Tetsuya KURATANI

ABSTRACT

Richard Cobden proposed a free trade principle that linked free trade with world peace. He is called by various names such as internationalist, apostle of free trade, and British politician. In this paper, we will show how he was raised to be such a person and contribute to free trade and peace by looking at the history of Cobden. His contributions to free trade have been referred as Cobdenism in modern times.

KEYWORDS : Richard Cobden, Free Trade, Peace, Cobdenism

はじめに

リチャード・コブデンに対する評価は多様である。その評価がどうであろうとも、保護貿易主義体制から、自由貿易体制に導いた要人の中の一人であることは間違いない。同氏は自由貿易と世界の平和を関連付けた原理を提唱した。平和が継続的であれば、政府は軍事支出を削減でき、その分を生産活動に分配することができる。コブデンの唱える原理は理想主義であるという評価もあるが、コブデンは自ら实际的な人であると称し、实际的な行動を行ってきた。1804年に誕生し、1865年に死去。1841年に議員になり、1859年にはフランスとの通商条約の交渉にあたり、南北戦争では、北部諸州（the Union）の大義を支持した。自由貿易の提唱者で、1839～46年の間、反穀物法同盟の主要支持者であった。¹

本稿ではこの英国の政治家、国際人、自由貿易の使徒、等様々な名称で呼ばれる人物の行動を多少なりとも報告したい。コブデンの行動は多くの教訓を現代社会に示唆している。

コブデンの自由貿易原理

反穀物同盟の自由貿易勝利の前日、1846年1月15日、マンチェスターで英国議員リチャード・コブデ

ンは演説をおこなった。それは、自由貿易原理がすべての面で、統治原理である未来世界の夢の概略であった。²

「…私はこの偉大な原則の目的や範囲について限られた見方をしたことがない。私は貿易商としてこの質問を主張したことは一度もない。

しかし、私は物質的な利益に注目し過ぎたと非難されてきた。それにもかかわらず、私は自分自身の研究でそれを夢見ていたどんな人よりも、この強大な原理の効果に対して大きくて素晴らしい見解を持っている。この原理がうまく働くと、物的利益は人類にとっては最小の利益になると信じている。さらに考察すると、自由貿易原理は道徳の世界に、宇宙の重力の原則として働き、人を引き寄せ、人種と信条、そして言語に対する敵意を脇に追いやり、私たちを永遠の平和の絆の中で結びつけることが分かる。さらに遠い将来を見た。私は薄暗い未来の中で想像し、そしておそらく夢を見た。今から先1000年後、私はこの原則の勝利の効果が何であるかもしれないかについて推測した。私は、その効果が世界の顔を変えることになり、その結果、現在支配しているものとは全く異なる政府のシステムを導入することになると思う。大規模で強力な帝国への願望と動機、すなわち、巨大な軍隊や大海軍の願望と動機、そして、命の破壊と労働の報酬の荒廃のために使わ

れるそれらの材料は消滅するであろう。人類が一つの家族になり、人の労働の成果を彼の兄弟の人と自由に交換するとき、そのようなことが必要でなくなるか、または使われるのをやめるであろう、と私は信じる。もし私たちがこの現世に再び登場することを許されるのであれば、遠い未来において、この世の統治システムは自治体システムのようなものに戻るのを見るであろうと私は信じている。それゆえ、私たちが提唱するためにここで出会った原理の勝利から、千年という憶測の哲学者は、これまで世界の歴史の中で起こった最大の革命の日付を定めるであろうと私は信じる。

生い立ち

ミッドハーストの傍にあるヘイスコットの小さな村落にあるダンフォードとして知られる古い農家は有名であった。この家は数世代にわたってある家族の所有物であった。そして、その家の所有者はリチャード・コブデンという農夫であった。³ 彼は、中世期までさかのぼり、ウエストサセックスの自作農であった。1739年に生まれたコブデンの祖父は麦芽製造業者であり農夫として、18世紀後半、穏やかな繁栄を持っていた。ミッドハースト区の行政官補佐 (bailiff) として彼らは数年間勤めた。そして、その息子であるウィリアムと、その妻ミリサント・アンバーが、コブデンと同じ所に住んでいたのである。⁴ コブデンが生まれた地は魅力的でならかな起伏があり、木が生い茂った田園地方である。通常、コブデンの名前が関連付けられる工業化された北部の厳しい世界とは、距離と精神においてははるかに離れたところに位置している。⁵

ウィリアム・コブデンとミリサント・アンバーの次男かつ4番目の子どもとして1804年6月3日に生まれた子供は、祖父の名前にちなんでリチャードと名付けられた。⁶ 5人の兄弟と6人の姉妹の家族であった。

この祖父が1809年、つまりコブデンが5歳のとき死去した時に、5人の子供たちにわずかばかりの遺産しか残さなかった。そしてダンフォードは売却さ

れた。

そして、この祖父の唯一の息子であるウィリアム・コブデンとその家族はミッドハースト郊外にある小さな農場に引っ越した。ウィリアム・コブデンは農夫であり、温厚な人物であったが、仕事の出来はよくなかった。⁷ 親切で優しい人物であり、他人が正直であるとか、公正であるかということに疑うことがなかったのである。疑うことなく、騙され、自分から少しずつ離れていく財産を取り戻すのに十分強い性格の持ち主ではなかった。⁸ 徐々に資本を失い、1814年には貧困を幾分でも軽減するために農場を売却しなければならなかった。ウィリアムは、家族の生計を立てていくことができなかったのである。コブデンの政治演説の中で、1〜2回生い立ちの状況に触れている。「私の父は小作人として、資産を失った。そして、ずっとはるかに望ましい農業の追及において否定された独立を見つけるという望みを持って、私は家の仕事から、製造業に逃げ込んだ。」⁹

父が深刻な財政的負担と心理的負担を負っていることを、父の事業の1820年代最初の数年の間にコブデンは知ることになった。それでリチャード・コブデンは実質上、家長となった。¹⁰ つまり、コブデンの父は、仕事で繁栄することなく、コブデンが幼いときに、死去した。コブデンの初期の教育が、不十分で不完全であったことは、父の早すぎる死去によるものであったといえる。¹¹ 1833年、彼の妹の一人はコブデンを「第二の父」と描写している。コブデンは愛想の良さを持って、この責任を受諾した。この愛想の良さは疑いなく、父から受け継いだものであり、後になって政治の成功を収めることに大いに貢献したのである。この愛想の良さを増し加える的を絞った勢力と知性を持っていた。これはおそらく母から受け継いだのであろう。¹² 旧姓ミリサント・アンバー (Millicent Amber) すなわち、コブデン婦人は勤勉で良き妻であり、優しい母であった。コブデン婦人の死後、その息子リチャードは、この母を力にあふれた敬虔な女の人と述べている。11人の子供がいて、物質的には困難があっても、幸せで安全な家庭を子供たちに何とか提供することが

できた。1814年、ウィリアム・コブデンの農場が売却された後、数回引っ越しをした後で、ピーターズフィールドのそばにあるウエストミオンに最終的に定着した時に、店を開店した。この店はこの家族の主要所得源となった。この店は一家の財産が縮小していくなかで、それを補う試みであった。¹³

状況はよくなりず、益々希望が消えつつあった。困難な時期ゆえにイングランドから出て行かざるをえない多くの移民の間で、この家族の長男であるフレデリック (Frederick) は、米国で生計を立てることを試みるために送り出された。数年間米国に滞在したが、父はいつもフレデリックが帰国することを切に望んだ。1824年に帰国したが、この渡米は、財政状況を改善することに全く貢献するものではなかった。¹⁴

教育

コブデンは他の子供たちよりは幸せではなかった。ミッドハーストの村にあるおばさん塾 (Old dame's school) でコブデンは読み書きを数年間、学習したり、父の農場で羊の世話をした。¹⁵ その塾においては、同級生の平均を上回る才能を示していたようである。¹⁶ その後、ヨークシャー (Yorkshire) のノース・ライディング (North・Riding) にあるパウズホールスクール (Bowes Hall school) にロンドンの商人である叔父の支援によって送り込まれた。そこは寄宿学校だったのである。ここに1814年から1819年まで滞在中。¹⁷ この滞在中、両親や友人に会うことがなかった。そこでコブデンは栄養不良であり、ひどい教育、ひどい扱いを受けた。¹⁸ 後になって、ここでの5年間のことをコブデンは、語るに堪えがたいと語った。¹⁹

1819年になってやっと、この悲惨な教育は終わりを告げた。ヨークシャーの惨めな学校を15歳で離れ、オールドチェンジ (Old Change)、ウオットリング通り (Watling Street) にあるパートリッジ (Partridge) という名の叔父の倉庫業で事務として迎えられたのである。屋内での決まりきった日課であり、後のより変化に富み、わくわくする巡回商人の

仕事とは対照的であった。

与えられた恩義感をうまく扱うことほど、難しいことは他になかった。コブデンの叔父と叔母は、謝意の代わりに服従することを期待したのである。コブデンが早朝、フランス語の学習をすることをよしとしなかったし、コブデンの本の知識の愛好は、事業家としての将来に対する凶兆であると思なされた。²⁰ 1822年にヘント (Ghent) での勤め口の話があった。²¹ コブデンにとってはかなり有益な仕事であったが、父が、それをよしとしなかった。決定をしばらく留保した後、父の願いに沿ったのである。コブデンの両親が、この仕事に就くことを反対した理由とは、フレデリックがすでに米国に行ってしまったので、もう一人の息子が海外に行ってしまうことを望まなかったことや、コブデンの3人の弟、チャールズ (Charles)、マイルズ (Miles)、ヘンリー (Henry) のために、ロンドンで仕事を見つけてくれることを期待していたからである。²²

当時のコブデンの小遣い帳を見ると、ダンスやボクシングを習ったり、損得を伴うトランプゲームをしたり、ボックスホール公園 (Vauxhall Gardens) に時折出かけたり、喜劇俳優であるチャールズ・マシューズ (Charles Mathews) を見に劇場に出かけたり、ヘンリー・ブルーム (Henry Peter Brougham, 1st Baron Brougham and Vaux) の大衆教育 (Popular Education) や、フランクリンの論文集、ジョージ・ゴードン・バイロンによる『ハロルド卿の旅 (Childe Harold)』の本を購入したことが読み取れる。²³ また、金額はほんのわずかであるが、父親や兄弟たちに対する贈り物をしたことや、奇妙なフランス語で寄付、貧しい少年に1旧ペニー、貧しい少年に2旧ペニーと書かれていた。同級生の両親宛ての手紙を代筆することによって、わずかな小遣いを稼いでいた。

1825年、腸チフス流行の真っただ中で、近所の病気の子供の看病を助けていた母親は、その疫病にかり、48歳で死去した。ところが、この同じ年に、コブデンは仕事における昇進を得たのである。コブデンの熱心さ、快活さ、技能によって、コブデンと叔父の間にあった初期の食い違いが和らげられたの

である。彼らの承認と業務上の信用を獲得したのである。²⁴

経済学、歴史、文学等の多岐にわたる一般的な読書が心の中に留まり、書物や演説のための思想と解説の基礎を提供した。取りつかれたように読書するその部分的理由は、自分自身の周辺と、その周辺が含むすべてのものに対する強い好奇心と、自分がこれから生きて行く生活をするための対抗手段であった。少年時代に、家庭の財産が崩壊し、生活の収支を合わせるためのそれに続く悪戦苦闘は明らかに深い感銘をコブデンに与えたのである。父と兄が財政的に不十分であったので、年少のコブデンは、家族の幸福のための、自分自身が主要な責任者であるとみなすことを学んだ。家族はいつも金銭の欠乏で苦しんだ。それで、コブデンはそれを正そうと決意した。²⁵

コブデンが30歳になる前に、巡回商人として、広範囲にわたって旅行をした。この巡回商人になることは全くの偶然と言ってよかった。というのは、病気になる巡回商人の仕事を引き受けるように依頼され、倉庫（または会計事務所）から、外回りに移されたのである。この新しい仕事において、多大な人気を得て、そして、コブデンを雇った雇用主に大量の注文を取ってきたのである。当時の多くの事業家たちは、夕食後の談話における率直で親しみやすいが、内気で謙虚なコブデンのマナーや、場合によっては、行商人用ホテルにおける部屋での議論を嬉しそうに思い起こすのである。²⁶ この間に、事業に精通し、多くの友人を作ったので、自前で事業を設立するという野望が生まれた。当時、資本がなかったで、2人の友人から合計500ポンドを借入、彼らと共同でキャラコ染製品の代理店を開始した。1832年には、マンチェスターにあるモズレー・ストリート（Mosley Street）に地所を構えた。この独立事業開始の背景には、コブデンは昇給に値しないとしか見なさない叔父に対する不満もあった。²⁷

こうした事業で優れた取引能力（business capacity）を発達させ、その中で特に他人に印象づけ、他人の信頼を得る実務能力を開発したのである。こ

の実務能力は生涯を通して、コブデンの最も際立った持ち味であった。マンチェスターに住所を持っていたので、サブデン（Sabden）でキャラコ染め事業の代理店となることができた。しばらくしてから、このサブデンのキャラコ染め工場を所有することになった。こうした一連の独立事業を通じて、最初の冒険の事業から、4～5年で著しい収入を得るようになった。²⁸ マンチェスターに定着するや否や、重要人物になったのである。²⁹ そして、1838年、製造業区域において、反穀物法協会（Anti-Corn Law Association）が設立された。そこマンチェスターに数多くの自由貿易主義者が集まり、バウリング博士（Sir John Bowring）が非常に厳しい言葉で、穀物法を非難した。³⁰ このような活動がコブデンに影響を与えたことは間違いない。

イングランド、アイルランドそしてアメリカ

それから、米国とレバント（the Levant）を訪問したのであるが、³¹ その前に、『イングランド、アイルランド、そしてアメリカ』という名称の小冊子を、マンチェスターの一製造業者というペンネームで出版してくれるように、ロンドンの書籍出版販売業者ジェームズ・リッジウェイ（James Ridgway）に頼んだ。そこでは、穀物法廃止は小冊子の最後にほとんど付録であるかのごとく、導入された。イギリス通商拡大にとっては、障害としての穀物法のとてつもなく大きな重要性をコブデンは強調したが、その問題をまだ徹底的に考え抜いていなかった。このパンフレットは最初、ロンドンで出版されたが、あまり関心を引き付けることがなかった。その後で、エジンバラの出版人テイト（William Tait）³² によって、6ペンスの廉価版が1万部販売されたのである。³³

公人としての生活の初期段階で、コブデンは非干渉政策の肯定的側面と否定的側面の間の完全なつながりを理解していた。国際通商を増やすことにより、富、安全保障、知識、善意がもたらされるが、階級による独占、政治的腐敗、帝国主義の野望とそれに付随する国内政策における危険や浪費の根源を

取り除こうとしたのである。1835年に出版された『イングランド、アイルランドそしてアメリカ』という題のパンフレットは、国内と外国政策間の結びつきに関する政治的思想のこの大きな潮流が、自由貿易に対する特定化された扇動に専念する随分と以前から、コブデンの心を捉えていたという貴重な証拠である。コブデン主義の初期の原稿を引き出したのは、部分的には偽りで危険な力の均衡原理に服従し、また他の部分では、領土拡張の追求においての諸外国の行動に外交的かつ強制的な干渉政策の切迫し継続的に再発している危険であった。

この小冊子の即座の目的は、コンスタンチノーブルの元英国大使館付き書記官アーカート (David Urquhart) のパンフレットに反駁することであった。³⁴ そのパンフレットは英国政府がロシアの伝えられたところによる攻撃的計画に対してトルコを保護するために、英国政府が干渉することを熱烈にアピールしている。これは、長期化し、そして最終的には成功することになる、アジアの未来の覇者であり、トルコの遺産の主張国であるロシアに対して英国とフランスを紛糾させる試みの一部であった。

この小冊子の結論部分はアメリカ合衆国の増大する経済力の説明と、アメリカ合衆国の権勢にうまく対抗するなら、外国や国内の出来事においてより啓発された政策を追求することの重要性に充てられている。³⁵

軍事支出の機会費用に関して、この小冊子でコブデンは以下の内容を告げている。ジョージ・ワシントンの退任演説で「米国にとって、諸外国に対する行動の大規範とは、通商関係拡大においては、政治的關係を可能な限り最小にすることである」と述べた。³⁶ つまり、ワシントンは貿易における政治のケースを述べたが、コブデンは経済のケースを概説したのである。

政府が支出した百万ポンドは必然的に民間部門によって支出されない百万ポンド（またはそれ以上）であることを認識していた。政府が資源を軍隊につき込む時、こうした資源は機会費用を持つ。コブデンは、軍事支出とは、それを成す全てのファージング硬貨であっても、税金の形で大衆の所持金から出

ていると言及している。

コブデンは全ての政府支出が大衆の厚生 (good) を促進しているとは考えていない。イギリスの軍事支出は、イギリス経済に対する重要資源の損失と見なしている。政府がより多くの資源を消費すればするほど、民間の富を生む活動に充てられる資源はますます減少する。政府あるいは行政部門は公共支出の増大から益を得ることができるが、大衆は損失を負うという。³⁷

さらには、この小冊子では、自由貿易運動を支持する事業家による組織の必要にも短く触れている。³⁸

穀物法廃止運動参加のきっかけ

『Recollection of Richard Cobden』の著者であるアッシュワース (Ashworth) によると、同氏は1837年、マンチェスターのユニオン・クラブにおいて、共通の友達 (Mr. S. D. Darbishire) の紹介から、リチャード・コブデンと知り合いになったという。³⁹ この年にアッシュワースが「プレストンにおける最近のストライキについて (A strike at Preston)」という名の論文を読み上げた時、かなり多くの政治経済学者が集めたというのである。おそらくずっと以前かもしれないが、この時に、コブデンは英国の経済状況を非常に注意深く注目し始めたかもしれないという。⁴⁰ この時、穀物法、保護、独占の話題が頻繁に集まった学者達の間で議論され、英国の通商発展にとっての最大の障害物であるとして非難された。リチャード・コブデンとアッシュワースはマンチェスター商工会議所のメンバーであり、穀物法の悪影響について、頻繁に協議した。コブデンはマンチェスター商工会議所を穀物法廃止の運動に使うのではないかと提案した。しかしながら、アッシュワースは、商工会議所の規則から、それはできないし、その目的のための出資金は不十分である。従って、もしもその運動を開始するなら、独立した運動でなければならないし、その特別な目的のために資金が提供されなければならないと答えた。その答えを聞いて、コブデンは失望したように見えたが、穀

物法廃止のために力を振り絞る決意をしたと述べたのである。⁴¹

実際の人間

コブデン自身は「实际的な人間」であることを好んで公言した。同国人の具体的な徳にならない時間は無駄であるとみなした。抽象的なことには異常なほど満足せず、理論や理論家には疑いを持った。単なる決まり文句には我慢ならず、党員の記章に対しては深い軽蔑を示したという。⁴² コブデンが勉強をしたある大学とは、いわゆる「偉大な巡回する政治大学」すなわち、反穀物法同盟（The League）である。アダム・スミス以外にラビ・ガマリエル1世のような人に師事したことはなかったという。⁴³

アダム・スミスの『国富論』は早くも1776年に出現した。しかしながら、その影響力は、出版当時よりも、コブデンの時代の方が大きかった。コブデンはいつもスミスの文献をあがめていた。コブデンの生涯が終わりに近づくとき、次のことをまだ述べていた。もしももう一度若返ることができるなら、アダム・スミスを掌握して、穀物における自由貿易同盟を、アダム・スミスの権威に基づいて促進したように、土地における自由貿易同盟を促進するであろうと。⁴⁴

コブデンは政治経済学者たちの文献を注意深く読んだ。そして、政治経済学者たちは、決して自由放任を無制限に適用することを提唱しなかったことを知った。1825年に出版された『政治経済学原理』において、個々人は可能な限り、独力で生きていかなければならないと、マカロック（McCulloch）は論じたが、どんな場合においても、そして、どんな危険を冒しても自由放任政策を提唱する経済学者や政治家は、閣僚よりも、精神科病院がお似合いであろうとした。労働者が大量に失業していれば、援助が与えられなければならないことを認めている。コブデンはこのことを理解し、大衆の生活水準を上げるために、政治に深い関心を持った。

特に公生涯の後半では、経済理論の主唱者達と敵対することもあった。日和見主義者と呼ばれること

もあった。フランスとの通商拡大の機会が出現すると、その機会に飛びつき、その通商条約を完遂するために真剣に取り組んだ。ただしこのことは、抽象的教義の言葉の繰り返しとは調和しなかったのであるが。⁴⁵ 穀物法反対運動においては、経済学者の支援を喜んで利用した。しかしながら、交換の自由の実際の推進を非難するお好みの常套句に訴える空論家を軽蔑したのである。⁴⁶

国際人

コブデンは「国際人」と呼ばれた。コブデンはフランス人同僚であるエミール・ドジラルダン（Emile de Girardin）によると、いわゆる国際人であった。⁴⁷ そして、ウェルビー卿（Lord Welby）はコブデンの事を次のように評している。コブデンは、個人の利益、国の利益、すべての国の利益は同一であると信じていた。そして、これらのいくつかの利益は、道徳性の最高の利益と完全にそして必然的に一致することと信じていた。この信念をもって、コブデンと共に獲得された経済的真理、道徳律の威厳と活力は、知者の不毛な原理としてとどまる代わりに、人々の心や良心を動かす生ける力となった。⁴⁸ 国際人とは、諸国間での平和と善意を信じる人のことである。そして、本来は、国際主義とは、欧州諸国の関係において主に使われた。しかし、第二次世界大戦後、この用語は、米国や他の非欧州列強すなわちロシア、トルコ、南アメリカ諸国を含めて大まかに用いられたという。⁴⁹

コブデンは庶民院において、最も旅行した人物であった。同時代の人々でコブデンほど世界を見たり、多くの権力者、商人、政治家、小作人と話した者はいなかった。コブデンはビジネスマンであったからではなく、商売をしながら旅行し、経験に伴う知恵を、注意深く、観察の鋭い精神の中に蓄えることができたから、偉大な指導者になったのである。本来、冒険好きであり、広く様々な体験を渴望していたので、世界の意義にいつでも注目していた。こうした資質があったので、ヨークシャーでの5年間の宿舍学校でのみじめな教育という不利益を覆すこ

とができたといえる。そのきっかけは、アイルランドとスコットランドに訪問販売者として送り出されたことであった。⁵⁰

民衆扇動家

コブデンとブライトは民衆扇動家であると言われてきた。彼らは確かに人々の指導者であった。しかし、民衆扇動家は、人々に媚びへつらい、甘い言葉でだますことによって、自分の権力を確保し維持すると、概して想定される。1854年にクリミア戦争が勃発した。英国は好戦的な傾向を常に持っていた。そして、英国の指導者達は、戦争が必要であると述べた時に、国民はあまりにも容易にその判断を受け入れた。このような状況下では、人気と権力を確保することにやっきになっている民衆扇動家なら、支配的雰囲気に対抗するはずがない。コブデンとブライトは、政府と国民は間違っている。そして、戦争は必要ないと考えた。良心が絡む時、人気など気にすることなく、彼らは議会の内外で彼らの考えを大胆に表明した。そして、その結果、彼らは人気を失った。そして、1～2年後、アロー号事件から生じた中国との戦争を非難したとき、彼らは議席を失ったのである。⁵¹ コブデンは単なる民衆扇動家ではなかった。

自由貿易というアイデアを政策にすることに貢献した政治家

自由貿易制度の理論的健全さや実際上の優位は、ある国の政府によって採択され、実際に活用されるまでのおよそ100年前に専門家達によって宣言されていた。そしてそれから、一つの国の政府によってのみ、採択されたのである。その国とはイングランドであった。その他全ての国家では、政治経済学になじみのない人たちが、政治経済学教授の結論を無視した。そして、自由貿易に関する政治家の行動は、自由貿易の思想家や著述家が提唱したことに対して真逆なものであった。研究者たちは、自由貿易原理を粘り強く提唱するのであるが、一方イングラ

ンドの場合を除いて政治家たちは頑固にもその反対の行動をとり続ける。なぜイングランドはその例外を成すようになったのか。探求するには興味深い主題を提供している。⁵²

デイビッド・ヒュームが、通商、貨幣、貿易収支、課税等に関する聡明な論文を刊行することによって、政治経済がその基礎を築いたのは、1752年であった。このような主題やその他の主題の取り扱いの中で、偶発的に、自由貿易や紙幣のことが論じられたのである。24年後、アダム・スミスが1776年に刊行された『諸国民の富』を持ってその後に続いた。ほとんど同時期に、ケネーとジャック・テュルゴー（Jacques Turgot）がフランスでほとんど同じ領域を掘り起こした。通商の自由に関する彼らの観点は多くの注目を集めた。その時期から現代に至るまで、多くの著名人が政治経済学を特に専門分野として研究し、ほぼすべての人々が、諸国の富に対する保護制度の有害な影響を非難することに意見が一致した。そうであっても、実際の結果をもたらすように、経済学の声が聞かれた唯一の国はイングランドである。他の多くの国で、自由貿易を提唱する人々がいたが、多くの者は無関心であり、関心を持つ者はほとんどなかった。⁵³

1824年までイングランドは保護貿易的の制度を持っていた。外国製の食料輸入をほとんどすべて禁じていた。過剰な輸入税によって、その他の外国製品の輸入を抑制し、縮小した。そして、航海条例によって、外国貿易を英国籍船舶利用のみに制限した。1849年が閉じられるまでに、全く逆の政策が採択された。登録を目的とした少額の名目的な関税を除けば、外国の穀物輸入を全ての関税なしで輸入することを認めたのである。ほとんどすべての外国製品に対する輸入関税を廃止し、海運の繁栄が長期に亘って依存していたと考えられた航海条例を廃止したのである。⁵⁴

これはよきにつけ、あしきにつけ巨大な変化であった。この変化の賛同者たちは、政策の健全さの深くかつ最も熱心な信念によって、支えられてきたに違いない。なぜなら、彼らは膨大な責任を負っていたからである。この新政策は試みられたことがなか

った。そして、非難され、激しく反対された。影響力を持つ人々によって、これは失敗に終わると予測された。この政策は経験に基づくものではなく、革新であった。他の国がそれを試みたことがなかったので、例に基づくものでもなかった。しかし、隠れてその制度を精巧に作成した思想家の理論に基づいていた。⁵⁵

このように、自由貿易はかつてはアイデアであったが、コブデンを含めた政治家たちがそれを政策としたのである。

マンチェスター学派におけるコブデン

19世紀に登場した経済思想のマンチェスター学派は、保護主義、特に英国の穀物法に挑戦した。1846年に穀物法が廃止された後も、平和と自由貿易を促進する提唱者の一勢力として存在した。⁵⁷

彼らは、英国が穀物法を廃止し、それによって、自由貿易に全力を傾けるように強要した実業家の集団である。自由放任の誇張された概念がこの名前と共に思い出される。マンチェスター学派は古典派経済学者達とは異なり、政府をある方法で活動するようにつもりである先導者の一グループである。そして、その会員は、彼らの目的に関して論じたり、書物を著したりするよりも、国を説得して、自分達の間に取り込むことに時間を費やしたのである。

マンチェスター学派は経済政策史において刺激的な名称である。グレートブリテンを自由放任原理に従わせる十字軍を形成するために、高い煙突や薄汚れた工場の間からやってきた事業家の大群をほうふつさせる。伝説によると、古典派経済政策原理を実施し、ビクトリア朝のブリテンを自由市場の実践国として、歴史においてマンチェスター自由主義は、できる限り市場に依存する政策を意味するようになった。そして、今日の古典派自由主義者にとってさえ、幾分あるべきところを超えている。⁵⁸

グランプ (William Dyer Grampp) によると、穀物法廃止運動の時期に、この学派には5つに区別できる集団があったという。その中の一つの集団は実業家の集団であり、自由貿易を欲していた。自由貿

易は繊維製品 (textiles) に対する需要を増大させ、賃金や他の費用を低下させ、さもないれば海外の繊維製品工場の拡張を阻止するだろう。またはこれらすべてのことを成すと考えていたからである。かれらは冷酷な人々 (Gradgrinds) であった。⁵⁹ そして彼らの行動はほとんど完全に私利に支配されていた。彼らはしばしば、マンチェスター学派全体を構成していたか、またはその政策を支配したと考えられていた。数の上では疑いなく大量であり、活動が必要とした、巨額の財政支援を提供したのである。しかし、この学派の唯一の人々ではなかった。彼らはリーダーシップを提供しなかったし、彼らの助言は必ずしも取り上げられなかった。ある時には、国を改革しようとする以前に、自分たちの身の回りを整理するように学派の他の人々から告げられたこともあった。彼らの立場に対してある種の同情があった。彼らは階級的に利己的であり、同時に不器用に表現されるので、彼らの数と財力なしでは何もできない人々と、彼らにこうあって欲しいとか、彼らには何ができないかを勧告する人々にとって、彼らは困惑の存在であった。

第2のグループはとても異なる種類の事業家から構成された。事業家階級の中では人道主義者であった。下級階級の厚生を向上するために特権を用いた農業における金持ちと同等の人々であった。人道主義の事業家たちは同じ理由で自由貿易を支持した。このことは彼らを模範的雇用主とさせた。すなわち、できることは何でもやり、下級階級を助けることが彼らの義務であると信じていたからである。そして彼らは穀物法に反対した。この法は不正で困窮化させる税を食糧に課していると信じていたからである。彼らは、彼らの労働者達の健康の面倒をみて、彼らが雇っている子どもたちに学校を提供した。その他の面においても、慣習以上にはるかによい扱いをした。高価な商品売りつける企業内商店による現物給与制の利用を拒否した。この制度下では、労働者は賃金をそこで支出することや、過度に高い社宅を借りることを要求されたのである。しかしながら、彼らは現行賃金よりもより高い賃金を支払った。そして、彼らが提供した特典を考慮する

と、労働者の実質賃金は平均賃金よりも高かった。生協や労働者の教育グループのような自助組織を促進した。そして、マンチェスター統計協会のような組織を後援した。この協会は工場労働のいくつかの状況調査を早くから行った。また工場法を施法することを助けるために、雇用者組合を形成した。

第3番目のグループが平和主義者である。コブデンがその代表者であり、比較的にはコブデンほどではないが、ブライトもその代表者である。彼らは自由貿易は世界中の買い手と売り手に、平和における経済的利益を強く与えるので、彼らの政府が戦争することを彼らが妨げるということを信じている。この考えはリカードから派生している。そして、その陳述は以下で説明される。コブデンが使ったと思われるのは、唯一リカードの考えである。そして、自分の議論を支持するために、コブデンはリカードの偉大な名前を呼び出していないので、おそらくその起源を知らなかったのであろう。マンチェスター学派は植民地や帝国に反対しているという評判を与えた。この反対を唱えるのはこのグループだけであり、この学派の他の集団の立場ではない。

第4のグループは哲学的急進派 (Philosophic Radicals) である。彼らは功利主義 (utilitarianism) の公的代表者である。そして、30年代と40年代の政治問題に、それを適用した。かれらの数人はジェームス・ミルの弟子である。彼らの原理は、自由放任の功利主義版ではない。実際のところ、それは政府干渉の様々な形態を正当化させるものとなった。1836年、ロンドンで彼らは反穀物法協会 (Anti-Corn Law Association) を結成した。チャールズ・ヴィリアーズ (Charles Villiers) は1841年まで庶民院で自由貿易主義者のリーダーであったが、コブデンがその立場を取った。そうであっても、穀物法廃止の動議を行いつづけた。その他としてはバウリング (John Bowring)⁶⁰ モールズワース (William Molesworth)⁶¹ グロート (George Grote)⁶² (John Arthur Roebuck)⁶³ ヒューム (Joseph Hume)⁶⁴、トンブソン (T. Perronet Thompson)⁶⁵ プレース (Francis Place)⁶⁶ がいた。彼らはマンチェスター学派に知的卓越をもたらしたのである。

第5番目の集団は中産階級急進派である。彼らは、職業や社会的起源が哲学的急進派とは異なっている。かれらのほとんどは、事業家であり、改革のためのイデオロギー上の正当化よりも、改革を確保する手法により関心があった。かれらは勢力、粘り強さ、創造力、勇気、才能においてマンチェスター学派の中では重要な存在であった。その中には以下のような人物が含まれた。マンチェスターの出版者ブレンティス (Archibald Prentice),⁶⁷ 議会改革と自由貿易の老練運動家であるスミス (J. B. Smith), 『Non-Conformist』の編集者、ジャーナリスト、解放協会 (Liberation Society) の設立者であるミオール (Edward Miall) が含まれていた。⁶⁸

穀物法廃止とコブデン⁶⁹

労働の雇用に関する問題こそが、コブデンが穀物法に対してなした攻撃におけるすべての事柄の要点である。コブデンとその友人たちが絶え間なく次のことを尋ねていた。1日に人口が1000人の割合で増加するとして、労働者の雇用のために、継続的に市場が見出されなければ、賃金率をいかに保つことができるか。そして、英国が外国の穀物、木材、または外国が生産可能なものは何であろうと、輸入することがなければ、外国はどうやって、英国の製品を輸入することができようか。コブデンはより良い市場を確保することによって、雇用を増加させることを目指していた。⁷⁰

1846年の穀物法廃止以前は、農産物に対する関税が、英国市場から外国生産物を取り除くことに成功した。しかしながら、こうした関税は農業における繁栄を伴わなかったのである。地主階級 (landed interests) は保護が必要であることを主張した。しかし、英国内のそのほかの多くの集団は関税に反対した。1839年、製造業者の団が食糧の自由貿易のプロバガンダを継続するという目的で反穀物法同盟を設立した。リチャード・コブデンとジョン・ブライトの指揮下で、この同盟は大集会や数多くの小冊子で、人々にメッセージを届けた。いくつかの外国勢力は、英国工業製品に対して、穀物でしか、支払い

をすることができない。そして、工業を拡張するつもりであれば、穀物を輸入しなければならないと論じた。同盟の数人は、食糧の自由貿易は生活費を下げるであろうから、労働の指導者たち (the Chartists) は反穀物同盟は、賃金を下げのために、この改革を欲していることがめることになった。

農業生産の全体的問題は、1845年と1846年に顕在化した。というのは、前年度の雨季が凶作と価格高騰を西欧でもたらしたからである。アイルランドの状況は、特に酷かった。主要食物のジャガイモが疫病により枯死したことで大飢饉が起こったのである。このような状況下では、行動が必要であった。輸入が許可され、穀物法は一時停止された。穀物法が一時的な停止状態で、状況は悪いままだったので、トーリー党のロバート・ピールは、農業保護は、再確立できるとは思えないと、内閣に告げた。それで、1846年6月、穀物法は廃止になった。穀物法廃止の英国農業に対する影響は直ちに壊滅的なものではなかった。コブデンが告げたように、輸送費が保護の役割を果たしたのである。そして1848年の革命や、クリミア戦争 (1854-1856年)、アメリカ南北戦争 (American Civil War) が競争を抑制したからである。1870年代になって、平和が戻り、より安価な輸送手段が到来して初めて、外国産品が英国農業を弱体化させる傾向を持ち始めた。

コブデンの影響

コブデンは自由貿易を「大いなる万能薬 (grand panacea)」としてほめちぎっていた。英国の熱狂者たちは最初、小麦と他の農産物に制限を課していた穀物法の廃止を強く求めた。そして、自由貿易とは相互的善意を持つ国の平和、安全保障、名誉、繁栄を確保する唯一の手段であると公言し、こうした原理を提唱するという唯一の目的のために、コブデン主義者たち (Cobdenites) は1843年に『The Economist』を創設した。創設者達は語る。「自由貿易、自由交換は他の目に見えるどんな経済主体よりも、世界中に文明と道徳規範を広めるであろうことを真剣に信じている。」⁷¹

また、労働者階級に対して影響を与えた。労働者階級はハリエット・マルティノー (Harriet Martineau)、1802-1876の書物、リチャード・コブデンの演説、反穀物同盟の小冊子、グラッドストーン (W. E. Gladstone) の議会表明から、経済学の教育を受けた。自由貿易は改革主義の政治家のみならず、ピールやベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) の支援さえ得た。自由貿易とは、安価なパンの塊であり、「ただの朝の食卓」であり、飢餓の40年代に戻ることを追放することを意味した。自由貿易は良き経済学としてのみならず、国際主義と平和の政治的脈略に位置づけられていたからこそ、組織化された労働階級の指導者たちは、自由貿易を支持したのであった。労働組合会議 (The Trades Union Congresses) は自由貿易決議案を可決した。自由貿易に対する賞賛はジェームズ・ケア・ハーディ (James Keir Hardie)、ラムゼイ・マクドナルド (Ramsay MacDonald) そして、フィリップ・スノーデン (Philip Snowden) のような社会主義指導家から来た。⁷²

コブデン主義は米国の政治家にも影響を及ぼしてきた。1860年から1932年の間、民主党は、保護貿易制度が輸入センシティブ産業と共和党間に腐敗した関係をいかに確立したかを喜んで暴露していた。19世紀の共和党が保護貿易制度支持において、顕著な一貫性を公然と示していたとすれば、民主党は自由貿易に対するあからさまな同意と、労働者のための保護制度の間で揺れ動いていた。バージニア州民主党議員タッカー (John R. Tucker) は歳入委員会委員であるが、頑固なコブデン主義を表明した。1878年のある演説で次のように語った。自由貿易は世界中に平和の大義を広げ、「地の上には平和が、御心にかなう人々にあるように」神の栄光を促進するであろう。⁷³ そして、自由貿易とはキリスト教の神聖原理の産物であり、世界に平和を作り出すものである。ニューヨーク州民主党議員コ克蘭 (W. Bourke Cockran) も歳入委員会委員であり、自由貿易の追及は人類に益をもたらすものとして正当化した。米国製品のために最も自由な市場を探索するにおいて、我々は人類全体の厚生を求める。この地を

文明の泉とさせるような通商制度を確立することを求める。⁷⁴

コブデンの平和の追求

ヘンリー 4 世等の初期の平和計画は、その当時、ある種の興奮をひきおこした。そしてそれ以来、敬意を持って引用されてきた。しかしながら、この計画は平和運動を導くことがなく、平和の大義を物質的に援助することができないと言われた。いかにして将来の戦争を回避するかという問題を真剣に考えさせるように向けさせたものは1815年の戦争疲れ（war-weariness）であった。アレクサンドル 1 世（Tsar Alexander）には、宗教的解決があった。すなわち、欧州の君主たちは兄弟の絆を結ぶということであった。そして、この絆を確実なものとするために、この絆が緊急に求める目的の高貴さと純粹さは、キリスト教宗教の聖なる原理に基づくべきであると薦めている。⁷⁵ ところが、クレメンス・フォン・メッテルニヒ（Metternich）やロバート・ステュアート（カスルリー子爵 Viscount Castlereagh）はより、実際のであり、より实际的な解決を示唆した。1815年11月20日、パリで列強の連合王国、オーストリア帝国、プロイセン王国、ロシア帝国の間で条約（Treaty of alliance and friendship between Great Britain, Austria, Prussia, and Russia）が締結された。この条約は、欧州の平和の維持と、諸国の安心と繁栄のために諸国が会議で協調することを定めた。これが国際政府の最初の実験の開始と考えられた。

1816年に、ウィリアム・アレン（William Allen）が恒久的平和促進協会（the British Society for the Promotion of Permanent and Perpetual Peace）を設立した。この運動の起源は全体的にクエーカー教徒によるものだった。この協会の基盤は、戦争とは、攻撃的であろうが、防衛的であろうが、キリスト教原理によると、まったく擁護できないというという命題であった。この協会はトラクトや講演という手段で、設立後20年間の間に、英国のほとんどの大きな都市に協会支部を設立したのである。この協会は

アメリカ平和協会（the American Peace Society）と心のこもった関係を維持した。1841年にクエーカー教徒ジョセフ・スタージ（Joseph Sturge）は米国を訪問した。主な目的は反奴隷制度運動に関連していたが、その目的の一つは、国際平和の大義を推進することであった。ボストンでアメリカ平和協会の大部分の活発な協会員に会った。⁷⁶ ロンドンにおける国際平和会議のプロジェクトが議論された。特に顕著なことは、米国の奴隷廃止論者ウィリアム・ジェイ（William Jay）の提案が決議されたことである。⁷⁷ その提案とは、同盟関係を開始するどの2カ国であろうとも、その2カ国間で生じうる紛争や問題は、一カ国以上の友好国の仲裁に向けさせることを相互拘束させる条項を、2カ国間条約の中に文言化するということであった。⁷⁸ これは、協会の当面の目的を具体化させるものとして大変意義深いことであった。なぜなら、どんな称賛に値するものであっても、原理だけに大衆運動の基盤を持たせることはできないからである。このように平和運動が実践的になったことによって、コブデンやブライトの協力が可能になったのではないか。⁷⁹

スタージが1841年以来取り組んできた第一回の国際平和会議は1843年6月22～24日、ロンドンで開催された。雰囲気は宗教的であったが、より实际的な面では、ジェイが提唱した仲裁の原理の採択であった。1848年5月23日、ヘンリー・リチャードが平和協会の主事になった。それから死去するまでの約40年間、この職にあった。ヘンリー・リチャード、ジョセフ・スタージ、リチャード・コブデン、そしてジョン・ブライトの名前は、この期間の平和運動と切り離すことができないほど結びつけられたのである。⁸⁰

最初の真剣な軍縮計画はフランスによって生み出された。1849年1月17日、英国大使は同じような規模で軍縮をするつもりであるなら、フランス政府はそのような軍縮をする準備があると告げられた。しかしながら、ヘンリー・ジョン・テンブル（第3代パーマストン子爵）は、英国は広範囲にわたる所有物があるので、そのような考えを受け入れることができないと返答し、この件は却下された。この事の

後、1852年11月10日、コブデンは以下の様に記した。もし欧州諸政府が、軍縮を促進する目的で、会合を開くつもりであるなら、英国以上の熱心さと誠意を持ってその運動に加わる国は他にない。⁸¹

当時、軍縮ではなく、仲裁が平和運動をする人々の主要な要求であった。米国ではジェイ、英国ではリチャード・コブデンとヘンリー・リチャードがこの約定仲裁を支持し、概して支持者を増やしてきた。1842年に略述されたジェイの計画では、多数で漸進的な同盟は様々な国々によって締結することができる。そして、こうした同盟は起こり得るどんな国家的な紛争であろうとも、その仲裁が保証されるというものであった。全ての条約に仲裁を約定する条項を挿入することによって、第一段階が達成されるというものだった。コブデンによると、約定国が将来の紛争を仲裁者の決定に従うことを拘束するという明示的な目的のために、諸条約を締結することを奨励した。結局のところ、このような条約の制度が徐々に確立していけば、いくつかの巨大な多国間の同盟に統一されていくであろうと彼らは考えたのである。⁸²

リチャード・コブデンが最初に小冊子『イングランド、アイルランドそしてアメリカ』を世に送り出した時、その著者名をマンチェスターの一製造業者（A Manchester Manufacturer）としていたが、独占者に反対して、製造業利益のために闘争している単なるマンチェスターの製造業者ではなかった。禁止的、保護関税を一掃しようと心に決めた、一つの事に熱中するだけの人ではなかった。リチャード・コブデンが言葉と行動の両方で、説明することを止めなかった原理とは次の通りである。自由貿易とは、自然が制約を付けることなく指名した道における自由通商であり自由な親交である。ただし、社会が課すことを全く必要とする制限はある。⁸³

どのような場合であっても、戦争の利益は全く疑わしいものであるということは、コブデンの初期の信念の妥当な展開にすぎない。コブデンはヘンリー・リチャードと平和協会と共に働いていた。そして、クリミア戦争に反対した。自由貿易運動が終了した後で、庶民院でコブデンが行ったことの一つ

は、国際紛争を仲裁によって解決する計画に賛成するという動議を出すことであった。⁸⁴ 1849年は平和会議の最高の年であり、仲裁運動の頂点の年であった。コブデンはあまりにも時代の先取りをしていたので、このような動議を成功させる機会を得ることができなかった。と言っても、79人もの賛同者を得たのである。⁸⁵ 反対派176人であった。この動議がなされたことによって、この動議に関して真剣な議論が必要であることが判明した。国会での審議によってのみ、仲裁が実際の政治の領域に持ち込まれることができ、そして国際的救済策の手段として考慮されることが保証されるのである。仲裁制度設置の最も有力な賛否両論を明白にするなら、この審議自体が啓発的であっただろう。

国際親善と自由人たちの同情的な賛同に対するコブデンの強い願望は、1848年の革命そして、特にフランスの状況に深い関心を持たせるようになった。フランス国王ルイ・フィリップ（Louis Philippe）退位のニュースがロンドンに到着し、庶民院にも通達された時に、コブデンはジョセフ・ヒュームのところに駆け寄り、次のように述べた。「もしも私が穀物法を廃止していなかったら、このことがイングランドでも起こっていたであろう。」このことに関するコブデンの本能は、すべての類似した問題においても同じだが、明快な文章の中にうまく表現されていた。すなわち、「政府間での交通はできる限り最小限に、世界の諸国間での結びつきはできる限り多く、」ということである。コブデンの意見によると、2つの国家間の関係の優越性は、支配者による不干渉と、商人、旅行者、著述家、そして全ての合法的な品目を扱う売買業者（traffickers of every legitimate description）の自由な相互交通に直接的に比例するであろうという。⁸⁶

コブデン主義は間違いであるという主張

ガービン（James Louis Garvin）はコブデンが関わった穀物法廃止以降の英国の状況を以下のように報じている。伝統的急進主義の死人の手を突き放し、時代の状況に適合していくことを願った。ダー

ウインの進化論の中心的概念である生存競争 (struggle for existence) の法則とは次のことを教えている。すなわち、生存とは、環境に適合することである。生存とは取り巻く環境が変化するにつれて、ある生物の変化する能力に依存することである。これが自然に関する諸国の鉄則である。このことがガービンの思考の中にあった。幅広い経済事項に関する入手可能統計を吟味すると、過去30年間の貿易の結果として、英国の通商上の優位は破壊されたとガービンは結論づけた。植民地との貿易は、その例外である。従って、英国の経済・帝国政策を変更することが国家的要請となった。言葉と数値で、ガービンは英国の経済状況の陰気な画像を描いた。過去数十年においてドイツと米国が経験した生産、輸出、人口の増加を描いてみせた。ドイツの鉄鋼産出高は英国のそれを凌駕し、米国は2倍である。過去20年の間に、鉄鋼生産において1位から3位に滑り落ちた。それだけではなく、ガービンの経済の実態分析によると、英国の貿易政策は問題であるとしている。⁸⁷

表1 ドイツの英国との輸出入貿易額

	1899年	1902年
ドイツの英国からの輸入	£31,000,000	£27,800,000
ドイツの英国への輸出	£40,000,000	£48,000,000

出所：Journalists for Empire: The Imperial Debate in the Edwardian Stately Press, 1903-1913 p. 43.

表2 米国の英国との輸出入貿易額

	1890年	1902年
米国の英国からの輸入	32,100,000	23,800,000
米国の英国への輸出	97,280,000	141,000,000

出所：Journalists for Empire: The Imperial Debate in the Edwardian Stately Press, 1903-1913 p. 43.

さらにガービンは以下の表から、英国は輸出にお

ける競争的優位を失いつつあるように見えると述べた。英国の経済の進展は弱く、2つの保護主義大国によって世界通商における地位を3位に陥れることを防ぐことができないほどであるという。そこでこうした数値から、ガービンは自由輸入政策と呼ぶことを好む自由貿易政策は英国を破綻させたと結論づけた。他の諸国は関税を法制化し、繁栄した。しかしながら、英国は自由貿易によって、外国の競争相手に自国市場を開放したが、一方では、こうした競争相手が英国財に課税することを許したのである。関税は英国貿易を制限し続けるであろうから、産出額を高める唯一の方法は、国内市場を確保し、植民地市場を拡張することである。帝国特惠関税制度のみが、この目標を達成することができるであろうと述べた。

表3 輸出の比較 1872-1902年(単位;百万ポンド)

	1872年	1890年	1900年	1902年
英国輸出:				
英国領土へ	61	87	94	109
諸外国へ	196	176	197	174
総額	257	263	291	283
ドイツ輸出	116	166	238	241
フランス輸出	150	150	164	170
米国輸出	89	176	304	282

出所：Journalists for Empire: The Imperial Debate in the Edwardian Stately Press, 1903-1913. p. 43.

1846年、イングランドは世界の主要工場であった。その経済的地位がなぜ変化したか。労働者の繁栄は確保されたか。新工業国が世界の場面に登場したという明白な理由以外に、ガービンは次のように述べた。自由貿易家たちが現在、間違っ、彼らの哲学にこだわっているように、リチャード・コブデンが穀物法廃止の戦いを導いていた1846年、コブデ

ンの目論見は間違っていたと考える。コブデンは自由貿易の英国の例に世界が従うと想像したが、現実にはそうではなかった。穀物法廃止後の30年間の英国の繁栄はコブデン主義を正当化するように見える。しかしながら、ガービン主張する。繁栄の源は、自由貿易ではない。どちらかと言えば、英国製品に対するニーズ、カリフォルニアやオーストラリアでの金鉱の発見が必要とした投資、蒸気機関や鉄道運輸の発展、19世紀中ごろの戦争であるという。そのうえ、この繁栄の期間、生活費が概して上昇したように、パンと肉の価格が上昇した。欧州大陸やアメリカの工業化という新しい時代が始まり、1世紀の間保っていた製造業上の独占は終わったのであると述べた。⁸⁸

コブデン主義から離れていく人

1933年ジョン・メイナード・ケインズは国家的自給自足の美德を熟考した。そして、それを労働の国際分業の追及と比較優位の便益と比較した。第一次世界大戦前は、リチャード・コブデンの世界の忠実な支持者であった。すなわち平和と繁栄は世界を通しての相互依存と、物的厚生と連結に依存することである。経済ナショナリズムは、嫉妬と敵意しか導かず、そしてそれゆえ戦争を導くであろう。1933年にケインズは、自由貿易は一つの経済政策であることのみならず、道德律の一部であると考えように教育されたと述べている。ケインズは第一次世界大戦後も、貧困に対する防衛と、国際的道德原理として、自由貿易と比較優位にまだ固執していた。ただし、自由放任からは離れてしまったのではあるが。ケインズは国際人から、他国に関心を持たない資本主義（insular capitalism）に移行し始めた。

1923年の『貨幣改革論』（A Tract on Monetary Reform）でその変更が読み取れる。英国の物価や賃金は、為替相場の決定に強制的に調整されるべきではないという。どちらかと言えば、国内事情によって為替相場が決定されるべきであるという。1930年までには、ケインズは自由貿易の美德をあまり確信し

なくなった。もはや存在しない賃金の柔軟性とよく調整された関税は失業を軽減するであろうことを自由貿易はほめかしたかもしれない。しかしながら、英国はもはや過去のように製造業における優位を持たず、相対的に高い賃金を持っていた。1933年には、コブデン主義からさらに離れ、財や資本の自由移動は、世界の諸力のいいなりに諸国を置くことと、そして、国内投資を通しての国内経済回復の追及を妨げることによって、平和を保証するよりも実際のところ戦争を喚起するかもしれないと考えるようになったのである。⁸⁹

イングランドにおけるコブデン主義の衰退⁹⁰

1845年12月のマンチェスターで開催された反穀物法同盟の集会で、自由貿易運動促進に用いられる125万ドルを募ることを決議した。1日で30万ドルが寄付された。『イングランドにおける自由貿易闘争』の物語を書いたトランブル（M. M. Trumbull）は、このような熱心な世論に対して立ち向かうものはないと述べている。⁹¹ 熱心さの表明は、自由な寄付という形をとり、通常印象深いものであり、しばしば、その目標を達成させる。自由貿易主義者たちは主張を通した。つまり、1846年2月28日、庶民院にて賛成337票対反対240票で穀物法を廃止したのである。この行動が取られてから、50年以上経過した。この間に英国は驚異的に進歩し、その時点では世界における最富裕国に位置づけられた。製造業は拡大し、外国貿易はある時期まで継続的に拡大し続けた。人口は1846年では17,000,000人未満であったが、50年後は、40,000,000人超になった。ロンドンシティの投資銀行家は金融業界で支配的勢力を持つようになった。

しかしながら、1897年、11月30日、ロンドンで開催されたコブデン・クラブの年次集会には、13人しか出席しなかった。結局その年に集まった金額は668ポンドであった。これはコブデン主義に対する関心が欠如していることを表している。英国人の評価や日々の英国のマスコミがマンチェスター学派の理論の評判を落とす傾向を持つ記事に満ち溢れ、そ

して、英国の通商の将来に関する決定的な不安を明らかにしていたなら、成功を断言するという感覚にこの関心の欠如は起因しているかもしれない。数年前、自由貿易思想に熱心に傾注していた人々は、今や、彼らの理論は誤っていることがありうることを認めていた。

コブデン主義者の基本的考えが覆されたことに等しい。彼らの体制の仮定とは、イングランドが自由貿易を採択すると、他の諸国は自衛手段として同じ制度を用いるように強制させるであろうということであった。

コブデン・クラブの報告によると、穀物法廃止後の15年間で、欧州における関税の重要性があるほどの削減はなかった。英国輸入に対して独立的な関税緩和によって、英国の輸出貿易に対する弾みは大きかったにもかかわらず、諸外国においてまだ維持されている英国貿易に対する制限が、しばらくすると、深刻に認められるようになった。⁹²

むすびにかえて

リチャード・コブデンの生涯はマンチェスターの一製造業者から国際人と評されることがある。そして、それだけではなく、英国政治家、自由貿易の使徒、実業家等、様々な側面を持つ。その影響は、いわゆるコブデン主義（Cobdenism）であり、その本質は自由貿易、平和、国際協力と要約できる。第一次世界大戦までは、イギリス政治において影響力があったといえる。

参考文献：

Almack, John. *Character, motives and proceedings of the Anti-corn law leaguers ; with a few general remarks on the consequences that would result from a free trade in corn*. London : John Ollivier. 1843.

Anderson, Earl Crawford. *The history of free trade in Great Britain*. College of Liberal Arts Boston University. 1931.

Apjohn, Lewis. *Richard Cobden and the Free Traders*. London : Walter Scott. 1886.

Ashworth, Henry. *Recollections of Richard Cobden, M.*

P. and the Anti-Corn Law League. London : Cassell, Petter & Galpin. 1876.

Barnard, H. C. *A History of English Education, from 1760*. 2nd ed. London : University of London, 1961.

Beard, Charles A. *An Introduction to the English Historians*. New York : Macmillan, 1908.

Bowring, John Sir. *Autobiographical recollections of Sir John Bowring*. London : H.S. King. 1877.

Braun, Carlos Rodríguez, and María Blanco. “Bastiat as an Economist.” *Independent Review* 15.3 (2011) : 421 +.

Briggs, Asa. *The Age of Improvement*. London : Longmans, Green, 1959.

Budney, Stephen P. *William Jay : Abolitionist and Anticolonialist*. Westport, CT : Praeger, 2005.

Bullock, Alan, and Maurice Shock, eds. *The Liberal Tradition : From Fox to Keynes*. New York : New York UP, 1957.

Cain, P. J. “J. A. Hobson, Cobdenism, and the Radical Theory of Economic Imperialism, 1898–1914.” *The Economic History Review*, vol. 31, no. 4, 1978, pp. 565–584.

Cain, Peter. “Capitalism, War and Internationalism in the Thought of Richard Cobden.” *British Journal of International Studies*, vol. 5, no. 3, 1979, pp. 229–247.

Cannon, John, ed. *The Oxford Companion to British History*. Oxford : Oxford UP, 1997.

Carty, Anthony, and Gennady Danilenko, eds. *Pere-stroika and International Law : Current Anglo-Soviet Approaches to International Law*. Edinburgh : Edinburgh UP, 1990.

Clough, Shepard Bancroft, and Charles Woolsey Cole. *Economic History of Europe*. 3rd ed. Boston : D. C. Heath, 1952.

Cobden Club. *Free trade and the European treaties of commerce ; I. Report of proceedings...* London : Cassell Petter & Galpin. 1875.

Cobden, Richard. *England, Ireland and America*. Third edition. London : James Ridgway and sons. 1835.

Cobden, Richard. *Speeches on questions of public policy*. London : Macmillan. 1878.

The Columbia University Press. “Cobden, Richard.” *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. 2018.

The Columbia University Press. “Hume, Joseph.” *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. 2018.

The Columbia University Press. “Place, Francis.” *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. 2018.

The Columbia University Press. “Urquhart, David.” *The Columbia Encyclopedia*. 6th ed. 2018.

Cunningham, W. *Richard Cobden and Adam Smith two lectures*. London : Tariff Reform League. 1904.

- Cunningham, W. *The rise and decline of the free trade movement*. 2nd ed. Cambridge : The University Press. 1905.
- Curtis, John, of Ohio, and Anti-Corn Law League (Great Britain). *America And the Corn Laws : Or, Facts And Evidence, Showing the Extensive Supply of Food Which May Be Brought From America, And the Effects of the Restrictive System On the British And American Trade*. Manchester : J. Gadsby, 1841.
- Daunton, Martin. "Presidential Address : Britain and Globalisation since 1850 : II. The Rise of Insular Capitalism, 1914–1939." *Transactions of the Royal Historical Society*, vol. 17, 2007, pp. 1–33.
- Dunkley, Henry. Leroy-Beaulieu, M. Paul. Barth, Theodor, Courtney, Leonard. Villiers, Charles Pel Ham. *Richard Cobden and the jubilee of free trade*. London : T. Fisher Unwin. 1896.
- Eckes, Alfred E., Jr. *Opening America's Market : U. S. Foreign Trade Policy since 1776*. Chapel Hill, NC : U of North Carolina, 1995.
- Edsall, Nicholas C. *Richard Cobden, independent radical*. Cambridge, Mass : Harvard University Press. 1986.
- Fawcett, Millicent Garrett. *Life of the Right. Hon. Sir William Molesworth, bart., M.P., F.R.S*. London : Macmillan and co., 1901
- Gordon, Nancy M. "Britain and the Zollverein Iron Duties, 1842–5." *The Economic History Review*, vol. 22, no. 1, 1969, pp. 75–87.
- Grampp, William Dyer. *The Manchester School of Economics*. Stanford : Stanford University Press. 1960.
- Halsey, Francis W., and William Jennings Bryan, eds. *The World's Famous Orations*. Vol. 4. New York : Funk & Wagnalls, 1906. Web. 18 June 2019.
- Henderson, Gavin B. "The Pacifists of the Fifties," *The Journal of Modern History*, Vol. 9, No. 3 (Sep., 1937), The University of Chicago Press. pp. 314–341.
- Hertslet, Edward Sir. *The map of Europe by treaty showing the various political and territorial changes which have taken place since the general peace of 1814*. London : Butterworths. 1875.
- Hirst, Francis W. *Adam Smith*. New York : Macmillan, 1904.
- Hirst, Francis W. *Free Trade and Other Fundamental Doctrines of the Manchester School*. London : Harper and Brothers. 1820.
- Hinde, Wendy. *Richard Cobden An Victorian Outsider*. New Haven and London : Yale University Press. 1987.
- Hobson, J. A. *Richard Cobden, the international man*. New York : H. Holt and company. 1919.
- Hobson, J. A., and Neville Masterman. *Richard Cobden : The International Man*. New ed. London : Benn, 1968.
- Howe, Anthony. *Free Trade and Liberal England, 1846–1946*. Oxford : Clarendon, 1997. *Questia*. Web. 26 June 2019.
- Jay, William. *War and peace the evils of the first and a plan for preserving the last*. New York : Wiley and Putnam. 1842.
- MacCunn, John. "The Commercial radicalism of Cobden," *Six radical thinkers, Bentham, J. S. Mill, Cobden, Carlyle, Mazzini, T. H. Green*. New York : Russell & Russell. 1907.
- Massingham, Hugh. *The Great Victorians*. London : I. Nicholson & Watson, 1932.
- McGilchrist, John. *Richard Cobden, the Apostle of Free Trade : His Political Career and Public Services, a Biography*. New York : Harper & Brothers, 1865.
- Mongrédien, Augustus. *History of the free-trade movement in England*. New York : Putnam. 1881.
- Morley, John. *The Life of Richard Cobden*, London : T. Fisher Unwin, 1903.
- Morley, John. *The life of Richard Cobden*, 14th ed. London : T. F. Unwin. 1920.
- Neilson, Francis. "Internationalism and Europeanism." *The American Journal of Economics and Sociology*, vol. 1, no. 1, 1941, pp. 79–82.
- Palen, M.-W. Free-Trade Ideology and Transatlantic Abolitionism : A Historiography. *Journal of the History of Economic Thought*, 37 (2), 2015. pp. 291–304.
- Phelps, Christina. *The Anglo-American Peace Movement in the Mid-Nineteenth Century*. New York : Columbia UP, 1930.
- Reuben, A. *A brief history of the rise and progress of the Anti-Corn-Law League, with personal sketches of its leading members*. London : B.D. Cousins. 1845.
- Richard, Henry. *Memoirs of Joseph Sturge*. London : S.W. Partridge. 1864.
- Schwabe, Julie Salis. *Reminiscences of Richard Cobden*. London : T.F. Unwin. 1895.
- Semmel, Bernard. *Imperialism and Social Reform : English Social-Imperial Thought, 1895–1914*. Garden City, NY : Doubleday, 1968.
- Startt, James D. *Journalists for Empire : The Imperial Debate in the Edwardian Stately Press, 1903–1913*. New York : Greenwood, 1991.
- Stringham, Edward P. "Commerce, Markets, and Peace : Richard Cobden's Enduring Lessons." *The Independent Review*, vol. 9, no. 1, 2004, pp. 105–116.
- Thompson, F.M.L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. London : Routledge & K. Paul, 1963.

Trumbull, M.M. *The free trade struggle in England*. 2nd ed. Chicago: Open Court Pub. Co. 1895.

Turner, Michael J. "The 'Bonaparte of Free Trade' and the Anti-Corn Law League." *The Historical Journal*, vol. 41, no. 4, 1998, pp. 1011–1034.

Wallas, Graham. *The Life of Francis Place, 1771–1854*. New York: Franklin, 1951.

Welby, Reginald Earle Welby Baron. *Cobden's work and opinions*. London: The Cobden Club. 1904.

Young, John P. "The Decay of Cobdenism in England," *The North American Review*. Vol. 166, No. 497 (Apr., 1898), pp. 418–428.

註:

1 Halsey, p. 156; "Richard, Cobden." The Columbia University Press.

2 Richard Cobden, *Speeches on Questions of Public Policy by Richard Cobden, M.P.*, ed. by John Bright and J.E. Thorold Rogers with a Preface and Appreciation by J.E. Thorold Rogers and an Appreciation by Goldwin Smith (London: T. Fisher Unwin, 1908). 2 volumes in 1. Vol. 1 Free Trade and Finance.

3 同性同名であり、本稿の主題として扱う人ではない。

4 ミリサント・アンバーは旧名である。

5 Read, p. 1.

6 Hinde, p. 1; Cook, p. 4.

7 Hindeによると、親切で、愛情あふれ、正直でよい人であると叙述されている。Hinde, p. 1.

8 Morley (1920), p. 3.

9 Apjohn, p. 85.

10 Morley (1920), p. 6.

11 Apjohn, p. 84.

12 Read, p. 1.

13 Read, p. 2.

14 Morley (1920), p. 5.

15 18世紀後半において、イングランドでは様々な種類の教育施設があった。国家がこれらの教育施設を補助したり、管理することはなかった。それらは個人によって運営され、多くの場合、教会の支援を受けていた。初等教育の中に、*dame school*があった。これは年配の婦人によってなされている。生徒一人当たりの費用は1週につき数ペニーであったとされる。Barnard, p. 2. Apjohnによると、この学校を *small grammar school* と叙述している。Apjohn, p. 85.

16 Apjohn, p. 85.

17 Hobson (1968), p. 413.

18 この学校の悲惨さは、ディケンズの小説「ニコラス・ニッケルビー」に登場するヨークシャーの寄宿舎学校ドゥザボーイズ・ホールのモデルであったかもしれない

いほどのものだった。

19 Morley (1920), p. 4.

20 McGilchristによると、雇用主であるこの叔父は、旧弊 (*the old school*) に囚われ、当時の偏見に深くはまっていたので、多大な読書はという道楽をし続けるなら、人生の将来性を台無しにしてしまうと警告したのである。p. 16.

21 ヘントとはベルギー・フランドル地域にある都市のこと。

22 Hinde, p. 4.

23 ヘンリー・ブルーガムは大英国の大法官 (Lord Chancellor)

24 Morley (1920), p. 7.

25 Hinde, p. 15.

26 McGilchrist, p. 17.

27 Hinde, p. 8.

28 Apjohn, p. 86.

29 Ashworth, p. 23.

30 Ashworth, p. 23. バウリング博士は当時、ランカシャーのブラックバーン (Blackburn) の議員であり、選挙区の有権者を訪問する途中でマンチェスターにいた。そして、博士と数人の晩餐の時に、彼らに2万人の織工による反穀物法請願書が紹介されたのである。バウリング博士は、健全な通商原理の広い見識を持つ雄弁な提唱者として世界的に有名であった。そこで、マンチェスターで同様な意見を持つ人々が喜んで同氏の話を聞くことは自然の成り行きであった。Reuben, p. 6. バウリング博士は自由貿易と穀物法廃止を提唱した。Bowring (1877) 参照のこと。

31 レバントとは地中海東部およびその島と沿岸諸国のこと。

32 『Edinburgh Magazine』の出版を行った。

33 Hinde, p. 20.

34 アーカートとはコンスタンチノーブルで様々な外交的手腕を発揮したと言われている。しかし、ロシアに対する敵意ゆえに召喚された。それゆえ、「元英国大使館付き書記官」と紹介されている。

35 Hobson (1968), p. 26.

36 Cobden (1835), p. 1.

37 Stringham, p. 106.

38 Read, p. 22.

39 Apjohn, p. 86.

40 Ashworth, pp. 86–7.

41 Ashworth, p. 87.

42 Cunningham, p. 6.

43 ここで参照されるガマリエルとは、新約聖書で言及されるラビのことで、使徒パウロがその弟子であった。ユダヤ教の長老である。この人の弟子ということは、最高の教育を受けていることを示唆している。

44 Read, p. 3; 土地における自由貿易を特にコブデンは

- 特定化していないと述べている。Morley (1920), p. 920.
- 45 Morley (1920), p. 807.
- 46 Cunningham, p. 7.
- 47 Hobson (1919), p. 9. エミール・ド ジラルデンは *L'Abolition de l'autorité par la simplification du gouvernement* の著者であり、この書名からも、コブデンの同僚であることが推察することができる。
- 48 Lord Welby, p. 18.
- 49 Neilson, p. 79.
- 50 Massingham, p. 123.
- 51 Lord Welby, p. 5.
- 52 Mongrédien, p. iii
- 53 Mongrédien, pp. iii-iv.
- 54 Mongrédien, p. 1.
- 55 Mongrédien, p. 2.
- 57 この節の記述は全面的に Grampp に依る。p. 2.
- 58 Grampp, p. 7.
- 59 グラドグラインドとはチャールズ・ディケンズの小説「困難な時代」の作中人物。冷酷な人を意味する。
- 60 パウリングはブラックバーンの議員、自由貿易と穀物法廃止の提唱者。
- 61 マンチェスター学派との関わりは、Fawcett, pp. 154-5 を参照すること。
- 62 グロートとは実業家、歴史家であり『History of Greece (ギリシャ史)』が主要著書。
- 63 ベンサムの弟子であり、ジョン・スチュアート・ミルの友人とされている。レッセフェールの信奉者でもある。詳細は Cannon, p. 815 を参照すること。
- 64 1818-1855年(中断はあるが)の間、議員であり、当時の改革のほとんどすべての諸問題における指導者である。“Hume, Joseph.” The Columbia Encyclopedia. 6th ed.
- 65 『Catechism on the Corn Laws (穀物法に関する問答集)』の著者である。Thompson, p. 71; Turner, pp. 1011-1034.
- 66 チャーティスト運動を放棄して、穀物法廃止運動に関わった。The Columbia University Press. “Place, Francis.”; Wallas, pp. 254-5; p. 391.
- 67 反穀物法同盟の公的歴史家と評される Gurney, p. 385.
- 68 Grampp, pp. 9-11.
- 69 この節の記述は全面的に Clough and Charles に依る。pp. 476-6.
- 70 Morley (1920), p. 141.
- 71 Eckes, p. 24.
- 72 Semmel, p. 97.
- 73 ルカの福音書 2 章14節の部分引用であり、欽定訳聖書では “Glory to God in the highest, and on earth peace, good will toward men.”である。
- 74 Eckes, p. 35.
- 75 Hertslet, p. 319.
- 76 Richard, pp. 351-52.
- 77 ジェイの平和計画の最重要項目とは、契約事項として規定された仲裁を求めている。この規定された仲裁とは、条約締結国間の相互合意によって、それらの国の間での紛争の解決の仲裁国として、中立国を指名することを必要とした。Budney, p. 92.
- 78 Richard, p. 351; Jay, pp. 81-2.
- 79 Henderson, p. 316.
- 80 会衆派の聖職者であり、平和の使徒と呼ばれ、平和と国際仲裁の提唱者として最もよく知られている。
- 81 Hobson, p. 91.
- 82 Phelps, p. 150.
- 83 Apjohn, pp. 234-5.
- 84 コブデンはウィリアム・ジェイの計画を庶民院で奨励したのである。Budney, p. 93.
- 85 Apjohn, p. 235.
- 86 Apjohn, p. 236.
- 87 ガービン (12 April 1868-23 January 1947), ジャーナリストで『The Observer』の編集者。
- 88 Startt, p. 43.
- 89 Dauntton, p. 1-2.
- 90 この節は Young に依存している。pp. 418-9.
- 91 Trumbull, p. 219.
- 92 Cobden Club (1875), p. 6.

抄 録

リチャード・コブデンは自由貿易と世界平和を関連付けた自由貿易原理を提唱した。コブデンは国際人、自由貿易の使徒、英国の政治家等、様々な名称で呼ばれている。本稿では、コブデンの生い立ちを振り返ることにより、自由貿易と平和にいかに関与したかを紹介する。そして、その自由貿易に対する貢献は現代でもコブデン主義として思い起こされている。

キーワード：リチャード・コブデン、自由貿易、平和、コブデン主義